

岐阜県におけるアライグマの生息状況

安藤 志郎・梶浦 敬一*

The Habitat Situation of *Procyon lotor* in Gifu Prefecture

Shiro ANDO, Keiichi KAJIURA

1. はじめに

アライグマ *Procyon lotor* は、北アメリカに生息するアライグマ科の哺乳動物である。岐阜県可児市¹⁾において、1970年代からアライグマの生息が一部の人によって確認されてきた。ペットとして飼育していた個体が逃げ出したとか、犬山市官林のモンキーセンターから逃げ出したとか話を聞くが確定した証拠はない。

1980年代に入って、アライグマの交通事故や幼獣の捕獲が報告され、1984年には、博物館へも、可児市土田大脇で保護された個体が資料として持ち込まれた。本来生息していないアライグマが自然状態の中で繁殖増加している可能性がある。比較的適応能力のある種であり、チョウセンイタチ *Mustela sibirica coreana* T・ヌートリア *Myocastor coypus* Molina のように本県でも帰化していることが考えられ、緊急に調査する必要性を認めた。調査は、1984年10月～1985年1月に行った。短期間のため、アライグマの生態に関しては今後の研究課題とし、今回の調査では、自然繁殖および生息分布に関して報告する。

今回の調査に際し、加茂高等学校生物部および生物部OBの方々のご協力を得た。また現地でも巢穴やアライグマとタヌキの足跡などの区別についてご指導をいただいた重田稔氏、記録用器材を提供いただいた岐阜県哺乳動物調査研究会に、心から厚くお礼申し上げます。

2. 調査地および調査方法

調査は、可児市土田を中心に岐阜県側に限定して行った。調査地を設定するため、次の手順に従い調査を進めた。

(1) アンケート調査 1984年10月～11月

県自然保護委員、狩猟関係者、捕獲・目撃者を対象に行う。内容は、アライグマの捕獲、目撃経験、場所、年齢等で、可児市5万分の1の地図を同封した。

(2) アンケート追跡調査 1984年11月～12月

アンケート回収と同時に返送者に対し聞き取り調査を行った。調査対象者は17名

(3) 現地調査 1984年12月～1985年1月

目撃、補獲地点を中心に現地調査を行い、生息の有無を確認し、調査区を設定した。

以上の結果から、調査地を可児市土田大脇・塩地区に置き、調査地区A・B・Cを設けた。

A・C地区では、餌づけを試み、出現する動物の足跡の確認と、自動カメラを使用した個体



写真1 調査地 手前は木曾川

*岐阜県立加茂高等学校教諭 1) 昭和57年可児町から可児市に変更

の確認を行った。また、A地区では、毎日足跡を消し、翌朝新たにつけられた足跡から、出現動物種の頻度を調査した。C地区では、巣穴の調査を行った。巣穴の入口周囲が土で光っている。巣穴の前のけもの道に足跡が残されている場合は使用されていると推定した。アライグマの足跡は、博物館収蔵標本²⁾と重田稔氏の現地指導により同定した。

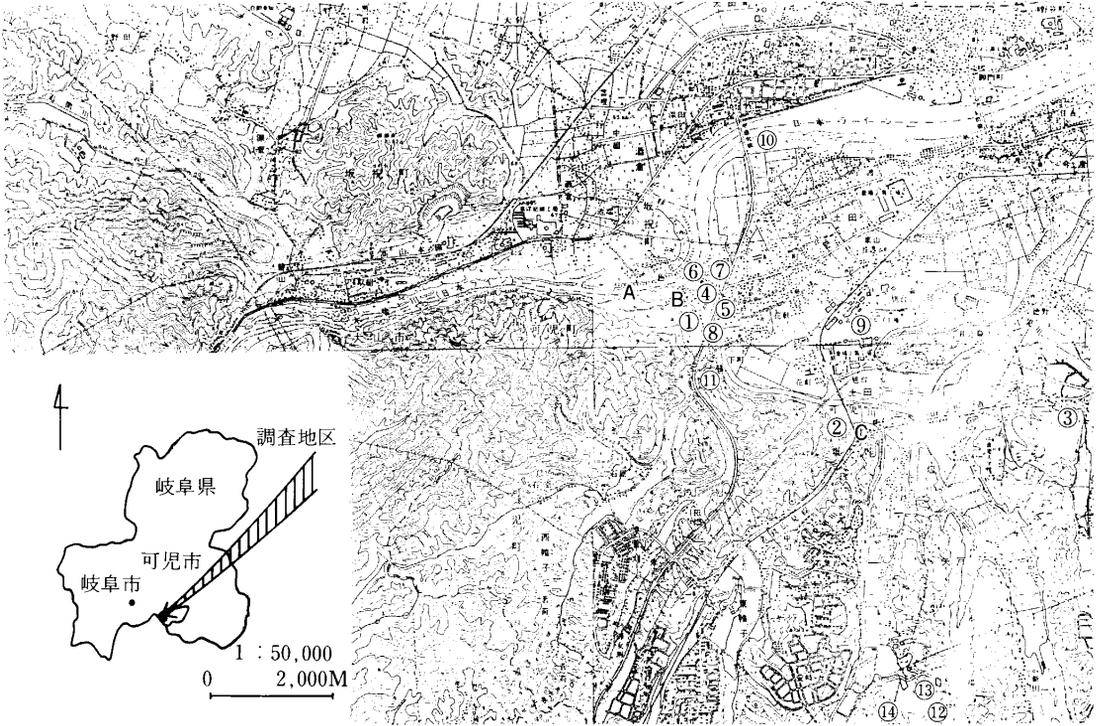


図1 調査地区

3. 生息環境

可児市土田は、近年名古屋のベッドタウンとして開発が進み、急激な人口流入と宅地造成で自然が破壊されつつある。大脇・塩地区は、標高150m~300mの山が多く、木曾川・可児川沿いはまだ自然が残されている。地質的には、大脇と塩の中間を断層が横切り、大脇は中生層のチャート、塩は第三紀の火山角礫層（岐阜県，1981）から成立している。特に、火山角礫層は可児川沿いに露頭し、一部が風化で崩れ、大小の穴を形成する要因となっている。調査地区一帯の植生は、木本類としてクリ、コナラ、アベマキ、アラカジ、シラカシ、ヒサカキ、アオキ、ウワミズザクラ、マンサクなどが見られる。草本類は貧相であるが、シシラン、ヒトツバ、ジャノヒゲ、イチリンソウ、ヒメカンアオイ、イワタバコなどが生育し、本来なら常緑広葉樹林を形成する地域と考えられる。放置された二次林的な要素が強く、山足部にはスギの植林が見られる。また、塩地区においてはクリの植林も見られる。可児川東部の農地は畑が多く、カキ、クリ、ウメが栽培されており、野菜類では、スイカ、トウモロコシ、ダイコンなどが作付されている。大脇から塩にかけての山には、リス、タヌキ、アナグマ、キツネ、ノウサギが生息している。1984年に大脇でイノシシが捕獲された（安藤・

表1 農作物被害

氏名	被害作物	備考
三宅健治	スイカ	2a (1982~1984)
三宅吾郎	スイカ トウモロコシ ピーナツ	
神谷鎮男	カキ キリ	庭のゴミ（特にタマゴの殻）を食べにくる

2) 1983・11・27 土田大脇で捕獲された個体

梶浦1985)のは注目すべきことである。大脇周辺の農家では野生動物による農作物の被害も、ここ数年目立ってきた。12月のクリ林の調査でも、クリの果実に食痕が残され、近くに、ウサギ、タヌキの糞を見つけることができた。また、スイカの被害に関しては、「食べ頃になると穴をあけ、中味をきれいに食べていく。スイカにバケツをかぶせて保護しても役に立たず、この3年間一度も収穫できなかった。」(三宅健治私信)との報告があった。

4. アライグマ生息状況

(1) 目撃・捕獲の実態

表2 アライグマ目撃・捕獲報告事例

地図番号	氏名	住所	目撃捕獲場所	年月日	頭数	雌雄	年齢	備考
①	重田 稔	可児市上恵土	捕獲 大脇塩	1977.12	48	19♂ 29♂	2ヶ月 6年	①大脇、②塩で捕獲、自宅で飼育する。 1982年になり、病死する個体が増えたため、一部(約40頭)を捕獲場所へもどす。
②			〃	1978				
③			〃	1979				
④			〃	1980 1981.12				
③	重田 稔	可児市上恵土	捕獲 坂戸	1979.10	2	1♂1♀		
④	鎌谷 満	可児市土田4267	捕獲 大脇	1980.7	1	—	3ヶ月	体長35~40cm 歯がはえそろっていない 2頭親から離れ、迷ったらしい
⑤			〃	1981.7	1	—		
⑥			〃	1982.7	2	—		
⑦	堀井 茂美	可児市土田2281	捕獲 大脇	1982.7	2	2♂	3ヶ月	1983年1頭死亡 1頭飼育中
⑧	三宅 吾郎	可児市土田4789	目撃 大脇	1983.5	1	—	—	大脇国道41号バイパスで車と衝突死亡
⑨	吉田 武	可児市今渡448	目撃 旭台	1983.9	1	—	—	名古屋ハルブ敷地内雑草地
⑩	高井 一明	富加町下羽生	捕獲 下切	1983.12	2	2♂	1年	中濃大橋上 河原 飼育中
	高木 昌弘	可児市御嵩町	目撃 御嵩上野	1983.8	1	ex	—	
⑪	旭 力	美濃加茂市三和町	捕獲 大脇	1983.11.27	1	♂	1年	飼育していたが、1984.4.26死亡 資料として県博物館へ
⑫	神谷 鎮男	可児市室原124	目撃 室原	1984.11.5	1	ex	3年	車と衝突し死亡 柿の木上で発見、1mまで近づく
⑬				1984.11.10	1	♀		
⑭	加地 郁子	可児市室原264	〃	1984.11	1	ex	—	柿の木上で発見、写真を撮影、⑫とは別の個体のようなのである(神谷氏談)

※ その他 1984年、太田剝製(美濃加茂市)にへい死体を持ち込まれ、その頭骨を梶浦が保有している。又善師野(犬山市)から目撃報告が寄せられたが、今回の調査対象から除外した。

目撃・捕獲頭数は、1977年~1984年間で累計65頭に達する。しかし重田の捕獲した50頭が飼育された後1982年に約40頭生息地へもどされている事実がある。それ以後の目撃・捕獲個体は、この40頭と重複する恐れがある。幼獣については、歯が生え揃っていないことから3ヶ月前後(重田私信)と推定され、自然繁殖したものと考えられる。重田は、捕獲したアライグマを1977年~1985年まで飼育した。飼育期間中の観察によると、発情期は10月~11月、出産は4月~5月であり、仔の頭数は1~3頭までであった。

(2) アライグマの出現頻度

A地区は木曾川の河原に位置し、小池の周囲は砂で足跡が確認し易い場所である。12月22日夜、b地点でアライグマの足跡を発見したので、翌日から餌づけを試みた。同時に足跡の確認しやすいa b c地点の足跡を毎回消し、新たな足跡から、動物の出現頻度を調べ

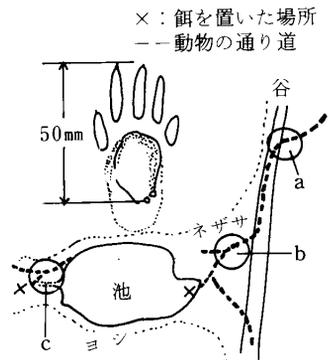


図2 A地区

た。この結果観察期間13日のうち、アライグマが10日、タヌキが10日出現した。24日は、複数のアライグマであった。出現頻度は、アライグマ、タヌキ共76.9%と同率である。種としては、これ以外にも、アカネズミ、ホンドイタチが記録されていることを付記する。

表 3 A地点における足跡の観察記録

1984-XII-22~1985-I-5

Day	a	Point b	c	Species	Foods
'84 XII-22	○	○	○	Proyon lotor Nyctereutes procyonoides	—
23	○	○	○	Proyon lotor	fish
24	○	○	—	Proyon lotor 2* Nyctereutes procyonoides	bread ※ family?
25	○	○	○	Proyon lotor Nyctereutes procyonoides	bread
26	○	○	○	Proyon lotor Nyctereutes procyonoides	bread fish
27	○	○	○	Proyon lotor Nyctereutes procyonoides	bread
28	○	○	○	Proyon lotor Nyctereutes procyonoides	bread
29	○	○	○	Nyctereutes procyonoides	bread
30	○	○	○	Proyon lotor Nyctereutes procyonoides	bread
'85 I-2	○	○	○	Proyon lotor Nyctereutes procyonoides	fish bread
3	○	○	—	Proyon lotor	fish bread
4	○	—	○	Nyctereutes procyonoides	bread
5	—	—	—		bread



写真 2 A調査地区の池

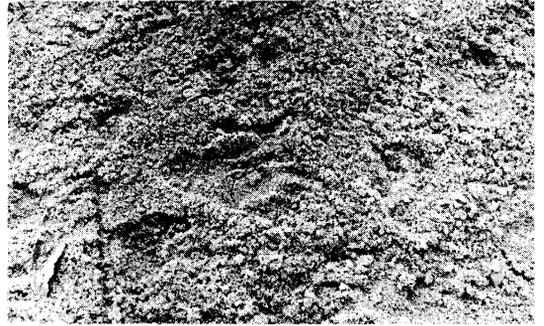


写真 3 b-pointに残されたアライグマの足跡

(3) 巣穴調査——C調査地区における巣穴の実態

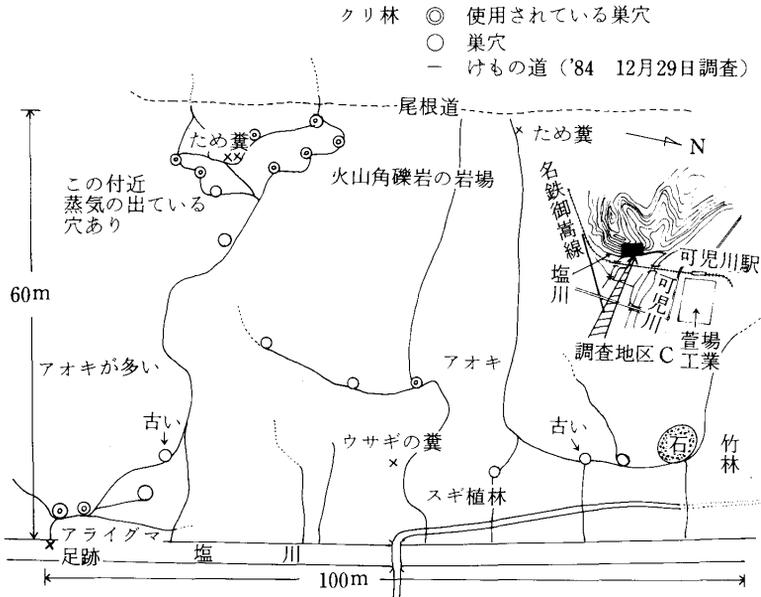


図 3 C 地区

図 3

C調査地区は火山角礫層から成り、自然の穴が非常に多い。塩川沿いに100m×60mの区域内を調査した結果19の巣穴が確認された。巣穴に続くけもの道は頻繁に使用され落葉もなく、土が露出し足跡が残されている。比較的安定した見晴しのよい場所のため糞があり、尾根近くに巣穴が集中している。これらの巣穴のうち、アライグマの巣穴は、①巣穴の入口周辺が土で汚れている。②けもの道の草や木に土が付着し、けもの道の土が踏み固められ光っている（重田私信）ことから区別できる。これは、アライグマの後ろ足がかかとまで地面に接するのに対し、タヌキは足先で歩行するからである。けれど、この事実から巣穴に生息する種を断定することは困難である。

(4) アライグマの推定生息数

C調査地区の巣穴の調査で使用されていると認められた穴は10である。この巣穴のうち、タヌキとアライグマの巣穴の割合を同率と推定した。表3より出現率が同じであること、また、この地区でのアライグマとタヌキの捕獲頭数が48頭と60頭（重田私信1977～1982）であることを基準にした。

その結果、調査地6000㎡あたりアライグマの巣穴は5となり、A～C調査地区までの可児川沿い5000m、幅60m内に250の巣穴が存在することになる。しかし、地質が大脇地区はチャート層であり、塩地区の火山角礫層と異なり巣穴ができにくい。

以上の結果から、巣穴に一頭が生息するものと仮定しても、少なくとも100頭を越すアライグマが生息すると推定できる。また、雑食性であり、自然繁殖をしていることから、今後生息数の増加が予想される。

5. まとめと問題点

可児市土田、大脇・塩地区を中心にアライグマの生息分布を調査した。その結果次のことが明らかになった。

- (1) アライグマは、可児市土田、大脇・塩地区を中心に自然繁殖していることが認められた。
- (2) 岐阜県におけるアライグマの生息分布は、可児市土田、下恵土、室原、加茂郡坂祝まで広がっているが、木曾川・可児川流域に限定されている。
- (3) アライグマの生息数は、少なくとも100頭を越えるものと推定される。
- (4) 愛知県犬山市におけるアライグマの生息分布は未解明であり、今後調査の必要がある。
- (5) アライグマの正確な生息数を把握するために、引き続きアライグマの生態調査と、タヌキ、アナグマ、アライグマの相関について研究する必要がある。

参考文献

- 今泉吉典 1975：原色日本哺乳類図鑑 保育社 東京
岐阜県高等学校生物教育研究会 1974：岐阜県の動物 大衆書房 岐阜
増井光子 1976：日本の動物 哺乳類 小学館 東京
岐阜県 1981：岐阜県地質産図
岐阜県哺乳動物研究会 1984：岐阜ふるさと動物 52, 72 岐阜日日新聞社 岐阜
" " 1984：岐阜県における哺乳動物の生息状況と、その環境調査及び環境教育にかかわる研究 24-101 岐阜研 太洋社 岐阜
" " 1985：岐阜ふるさとと動物通信 No.2. 岐阜研 岐阜



図4 アライグマ推定生息地域



写真4 大脇 B地区



写真5 塩 C地区全景



写真6 大脇 A地区
池に残されたアライグマの足跡



写真7 大脇 A地区 b-point
アライグマの足跡

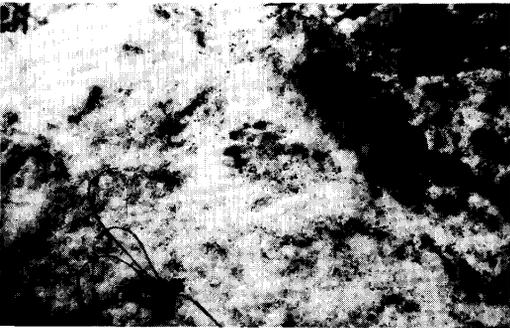


写真8 塩 C地区
雪の上に残されたアライグマの足跡(後足)

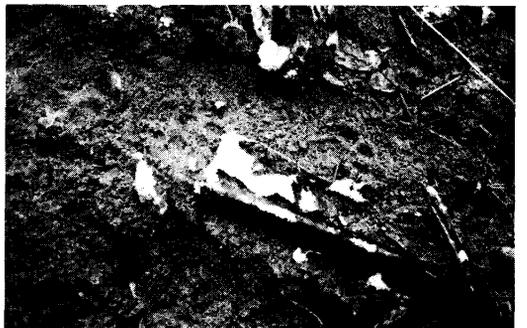


写真9 大脇 A地区
タヌキの足跡



写真10 塩 C地区 巣穴



写真11 大脇 B地区 けもの道

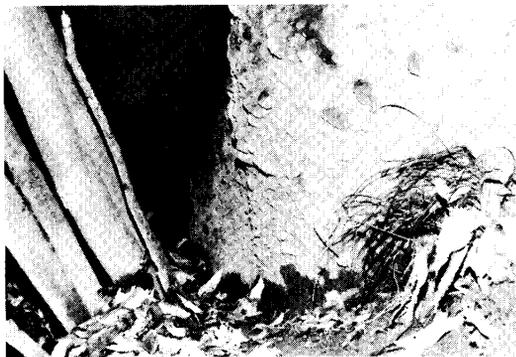


写真12 塩 C地区 尾根近くの巣穴



写真13 坂祝地区アライグマの足跡



写真14 博物館収蔵資料のアライグマ



写真15 高井一明氏飼育のアライグマ



写真16 堀井茂美氏飼育のアライグマ



写真17 アライグマの頭骨



写真18 カキの実を食べに来たアライグマ (加地郁子氏撮影)



写真19 大脇A地区のアライグマ (1985年2月3日, 0時34分)